4　出土遺物

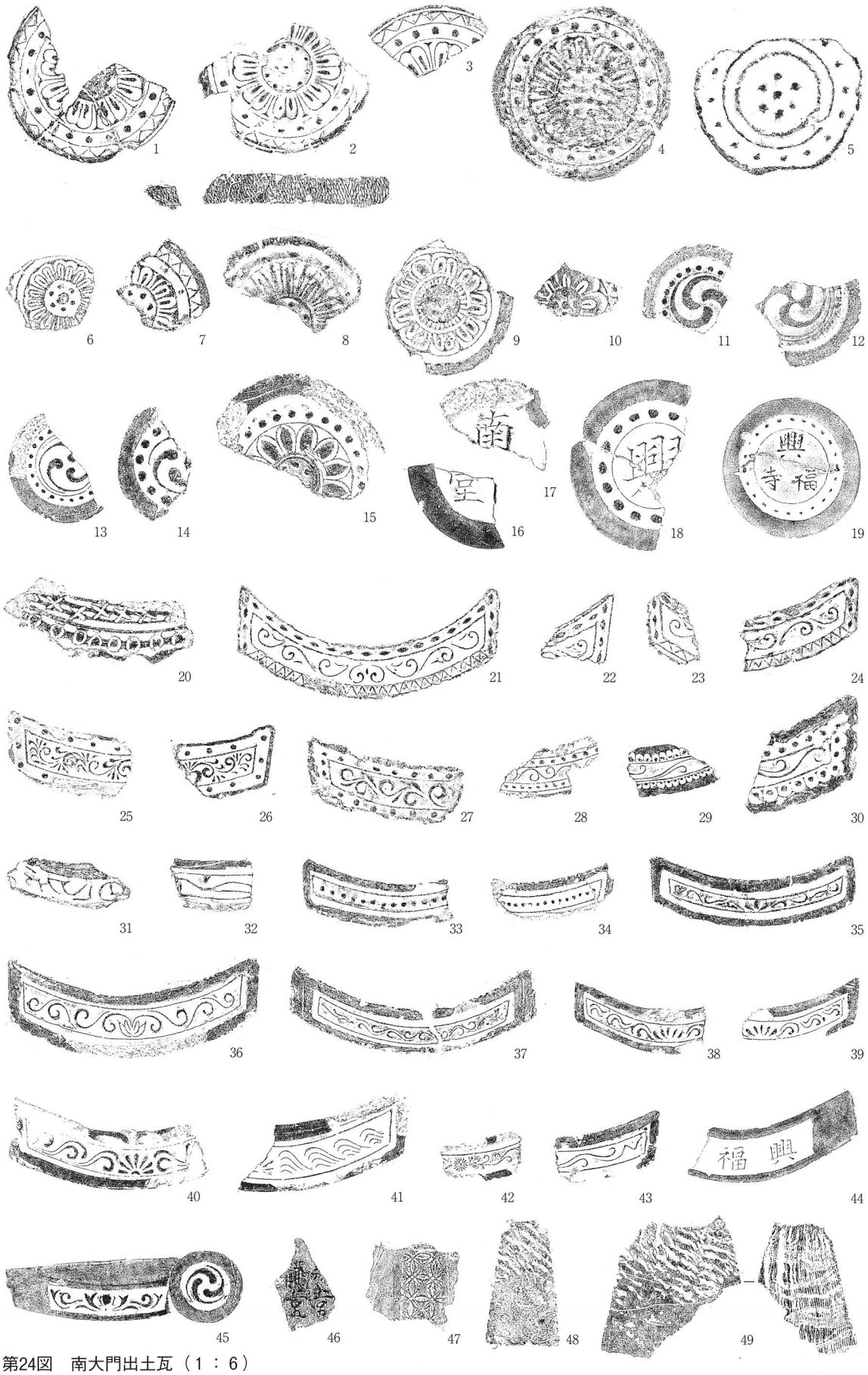
(1)瓦磚類

出土した瓦磚類は合計44,802点で、うち瓦は軒丸瓦256点、軒平瓦230点、丸瓦8,538点、平瓦35,418点、道具瓦247点からなる。軒瓦の数量を時代別にみると奈良時代42点、平安時代57点、中世164点、近世142点となる。なお、調査区東部から緑釉水波文磚小片が1点出土した。

軒丸瓦（第24図－1～19）　1～4は創建瓦の興福寺式6301Aである。このうち2は瓦当部下側面の残存部分全体に縄叩き痕があり珍しい。6301Aは計13点出土し、奈良時代の瓦では最多である。瓦当裏面の布目痕跡は4点、笵端痕跡は3点において観察した。5・6は奈良時代中頃～後半の瓦で、5は笵の損耗が顕著な東大寺式6235、6は6282Hである。7は平安時代前期、8～10は同後期の蓮華文軒丸瓦である。平安時代では後期の瓦が多く、永承の火災（1046)を皮切りに焼亡・再建が繰り返されたことを反映する。11・12は外区に多数の小型珠文を配した中世の三巴文軒丸瓦である。11は巴頭が尖り、12は巴頭が相互に接している点で古相を呈する。治承の兵火（1180）以後、嘉暦焼失（1327）以前の瓦であろう。13・14も珠文縁三巴文軒丸瓦だが、巴断面は半円形で巴頭は丸く仕上げられ尾部との区別が明瞭である。このうち13は珠文が小さく数が多い。圏線も明瞭である。室町時代後半に帰属しよう。他方、14は圏線もなく大きな珠文が少数巡る。焼成も非常に良好なので近世後半のものであろう。15は珠文縁単弁蓮華文軒丸瓦で、慶安年間の北円堂修理瓦ともいわれる。16・17はそれぞれ「堂」「南」銘をもつ。「南円堂」銘入り軒丸瓦で、享保火災（1717）後の南円堂再建期のものであろう。18は「興」、19は「興福寺」銘をもつ近世後半以降の珠文縁軒丸瓦である。

軒平瓦（第24図－20～45）　20は久米寺式6561Aで興福寺創建期を遡るものである。「○」印の間隔はやや広く、「×」印の配置が不規則である。21～24は6671で、21・22はA種、23はE種、24はL種である。6671A・Lは長い貼り付け段顎をもつ興福寺創建瓦である。両型式の多くはSK9420・SK9426より出土した。一方、23に掲げた6671Eは段顎が短い。ところで、養老4年（720）の「造興福寺仏殿司」設置により平城宮・京内に現れた長い段顎の6671Bが、長い段顎の6671Aからの影響で成立したなら、6671Aの段顎が短小化ないし消失するのは同年以後のこととなるため、短い段顎の6671Eの年代も同様に推定し得る（『平城宮発掘調査報告XⅢ』317頁)。したがって、23が南大門基壇版築土基底部黄褐色土中から出土したことは、創建年代を考える上で重要な意味をもつ。25・26は曲線顎をもつ珠文縁均整唐草文軒平瓦で、奈良時代後半～平安時代に帰属しよう。奈良時代とすれば新型式となる。27は平安時代の前期、28～30は平安時代後期の珠文縁均整唐草文軒平瓦である。文様の類似から、30は軒丸瓦10と組み、永承再建時の瓦とされている（『興福寺食堂発掘調査報告』)。31・32は植物文を配し、31は凸面瓦当付近に面のある曲線顎を、32は低い段顎をもち、やはり平安時代後期に比定できる。33・34は鎌倉時代の連珠文軒平瓦である。35～43は室町時代の軒平瓦である。35～37はいずれも唐草文を飾り、35は瓦当貼り付け技法、37は顎貼り付け技法をもつ。37は瓦当外区調整も明瞭で、室町時代でも後半に属しよう。38～41は中心半裁菊花文に波状文を有し、同じく室町時代後半の資料とみる。42・43は唐草文を有し、43は中心菊花文をもつ。44・45は江戸時代後半の資料で、享保焼失～廃仏毀釈までの所産であろう。

46・47は特殊叩き目（46は「講堂」の文字叩き）をもつ中世平瓦である。48・49はSK9426出土の特殊丸瓦で、凸面に螺旋状の叩き目を残し凹面に繊維痕が刻まれた特異な資料である。　（森先 一貴）



第24図　南大門出土瓦（1：6）

(2)土　器

興福寺南大門では、整理箱で14箱の土器・陶磁器が出土したが、半数は表土および茶褐色土（近代盛土）からの出土である。

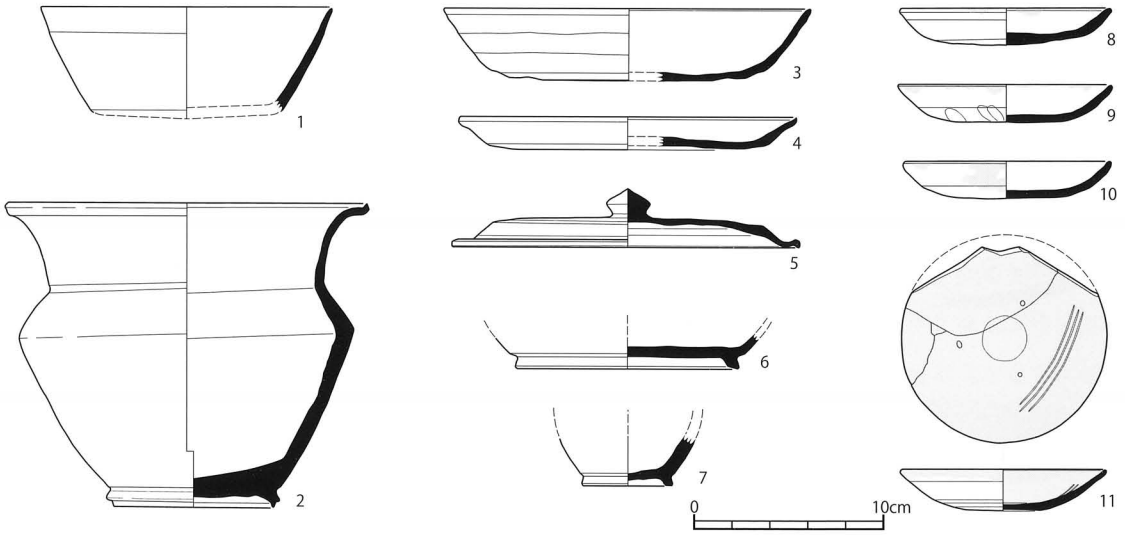
第25図１は、須恵器杯。基壇断割の西壁（標高93.2m）から抜き取ったもので、基壇築造直前の整地層②に含まれていた。口縁部をわずかにとどめるが、底部を欠いている。内面の底部近くと外面の一部に赤色の付着物があり、蛍光X線分析の結果水銀朱と判明した。奈良時代のもの。

２は、鎮壇具埋納遺構SX9361から出土した須恵器広口壺（壺Q）で、鎮壇具容器に用いたものである。口頸部は基部が太く、外彎して外上方に広がり、口縁端部は小さくつまみ上げている。口径と体部最大径とでは前者がやや大きい。体部上半に明瞭な稜線をもち、下半は回転ヘラケズリで整える。高台は外反し、端部が尖っている。奈良時代前半のものであろう。

第25図３～７は、SX9420の出土土器。SX9420は調査区東南部の瓦だまりで、多量の瓦とともに９世紀前半の土器が出土している。土師器は細片が多く保存状態がわるいが、杯A、椀A、皿A、皿C、盤、高杯、甕がある。全体にｃ手法のものが多いが、杯、皿、椀にはヨコナデで仕上げたものもある。黒色土器A類の破片には、杯A・杯Bの双方がある。須恵器は少数の杯Bとその蓋、壺M、鉢の破片があるのみである。３は土師器杯Aで、口縁部の上半をヨコナデで仕上げる。口縁部から底部にかけて黒斑をもつ。４は土師器皿Aで、やはり口縁部をヨコナデで整形している。５は、須恵器杯B蓋。平坦な頂部外面にロクロケズリの痕跡をとどめ、乳頭状のつまみを付す。６は須恵器杯Bの底部。７は須恵器壺Mの底部で、断面台形の高台を付している。

第25図８～11は、調査区東南部の灰褐色土から出土した近世の土師器皿と陶器皿である。これらは東南隅の地覆石SX9384のすぐ南側に埋没していたもので、４枚が重なって出土した。８～10は土師器皿で、同規格（口径11.0cm、器高2.0cm）のもの。いずれも口縁部内面に煤が付着し、灯明器に用いたことがわかる。11は内面と口縁端部に施釉した京－信楽系の陶器皿。内面見込みには目跡３箇所をとどめ、３本の平行する条線がある。底部外面はロクロケズリで整える。外面にはタール状の物質が付着しており、やはり灯明器である。

（森川 実）



第25図　南大門出土土器（１：４）

（3）金属製品・銭貨

金属製品（第26図－１～７）　金銅製品には紐金具、鶏形製品、銅製品には巡方、銅鋲、キセルなどがあり、鉄製品は、釘が60点と最も多く、この他に鎹などがある。

１は銅製巡方。平板形式の表金具である。内面の四隅に鋲足を鋳出し、外を斜めに面取りする。現寸法は横3.0cm、縦2.5cm、厚さ0.25cmで、透孔の寸法は横2.1cm、縦0.6cmである。表土より出土。

２は金銅製の飾金具で、鐶台と鐶からなる。鐶台は、表裏面ともに四隅が斜めに面取りされた切子形で、裏面に鐶座金具との接合痕跡が認められる。鐶は楕円形に作られ、その最大径は5.2cmである。中世に見られる手箱の紐金具、あるいは甲冑の総角付金物の一部と考えられる。

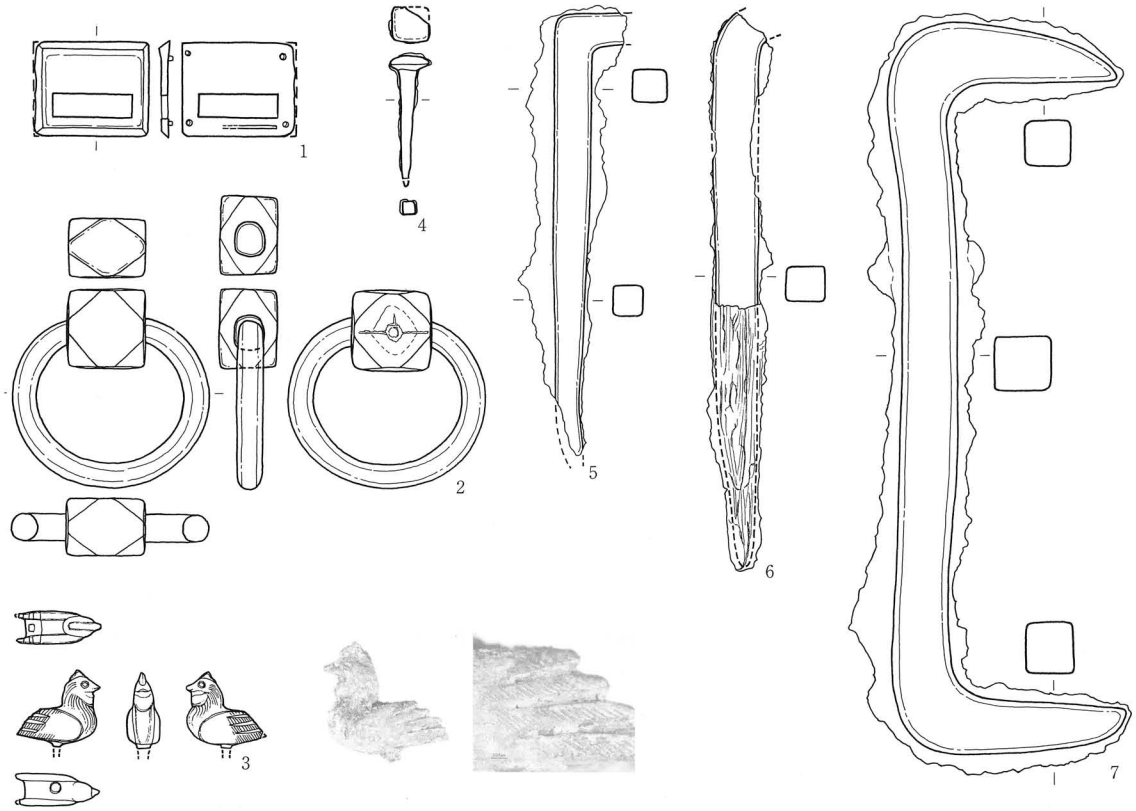
３は鶏形金銅製品。全体長、高さともに1.0cm。目や鶏冠、羽毛などが、毛彫りによって細かく表現されている。欠損しているが、底面には鋲足が鋳出されており、何らかの付属品と考えられる。基壇下、東南隅の灰褐色土より出土。

４は銅鋲。方頭である。頭部と先端部をわずかに欠損する。残存長3.2cm。

５・６は鉄製の折釘。このうち、頭部形状の判明するのは５のみで、軸部上端の厚さを減じず、直角近い角度で折り曲げている。６は頭部の大部分が欠損するが、屈曲部が認められ折釘と考えられる。下半部に木質が銹着する。両者とも基壇下灰褐色土出土。この他に円頭釘も出土している。

７は鉄製の鎹。脚部両端がほぼ直角に派生する。軸部断面形は正方形をなす。表土より出土。

銭貨　表土、茶褐色土、灰褐色土、土坑から89点の銭貨が出土した。銭種別にみると、寛永通宝が42点と最も多く、その他に文久永宝、二十銭、十銭、五銭銀貨、一銭、半銭銅貨などがある。基壇削平後の盛土と考えられる茶褐色土には、大正９年に発行された一銭銅貨が含まれる。　（芝 康次郎）



第26図　出土金属製品（１：２、３のみ１：１）

（4）SX9361出土鎮壇具容器の内容物

調査経過　SX9361から出土した須恵器広口壺は、出土位置や出土状況から発見時より鎮壇具容器と推測されていた。壺内には土が詰まった状態で、内部調査が必要であったことから、その状態を維持しつつ現場から研究所へ持ち帰った。内容物取り出しに先立って、X線透過撮影および高エネルギーX線ＣＴスキャンによって、内部調査をおこなった。その結果、広口壺の底部に貼り付くように和同開珎５枚とガラス小玉13点が存在していることを確認した（第27図５・６）。それと同時に、壺内埋土の断面画像に３つに区分できる濃淡が見られ、それは土質などの違いを表しているものと予想された（同図５）。

これら内容物や埋土の情報を考慮して壺内を精査した。有機質遺物の出土も予想され、作業には慎重を期した。発掘過程において、断面画像で３つに区分できた埋土は、予想通り土質の違いと対応することが判明したため、上から１、２、３層と名称を付した。

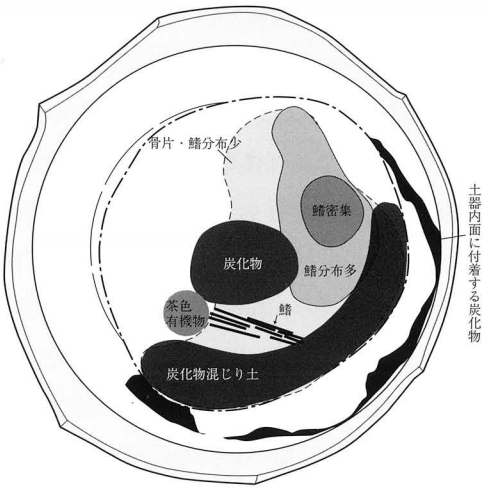
１層は非常に固くしまる黄褐色粘質土。層厚は最大８㎝。２層は、１層とは対照的にしまりがほとんどない黄褐色細砂。層厚は最大で10㎝。１、２層では遺物の出土は皆無であった。３層は炭化物、魚骨、植物質有機物、織物片などを大量に含む黄褐色細砂。それらは、広口壺底部から高さ５㎝ほどのところから出土しはじめ、銭貨上面まで続いた。３層はほぼ水平堆積だが、１層は土塊状の黄褐色土で、２層の砂質土は、１層と３層の間に陥入するように堆積していた。

３層における遺物分布　３層で確認された遺物（遺存体）は、炭化物、魚骨、植物質有機物（茶褐色、白色）、織物片、和同開珎、ガラス小玉である。これらはおよそこの順序で見つかり、平面分布にも差があった。炭化物集中は、上方では広口壺内面に沿い、下方ではほぼ全体に広がる。これとほぼ同じ場所に魚骨が分布する。一部で密集部を形成しており、中央部からやや東よりにかけて鰭が、下部では頭骨片が見られる（同図１）。魚骨の下層には茶褐色有機物が見え、その下層にある銭貨の上面を覆うように分布する（同図２）。茶褐色有機物と同レベルで、中央やや左寄りに白色有機物片が見られる。その下層に銭貨、ガラス小玉がある。銭貨上面には繊維状の有機物が付着し、さらに銅イオンによって緑化した１～２㎜の織物片が数点ある（同図３）。ガラス小玉13点のうち、10点は銭の下方で孔を上に向けた状態だが、３点は、銭から離れて孔を横に向けた状態で分布する。広口壺底面には、白色の繊維状の痕跡が認められる（同図３・４）。

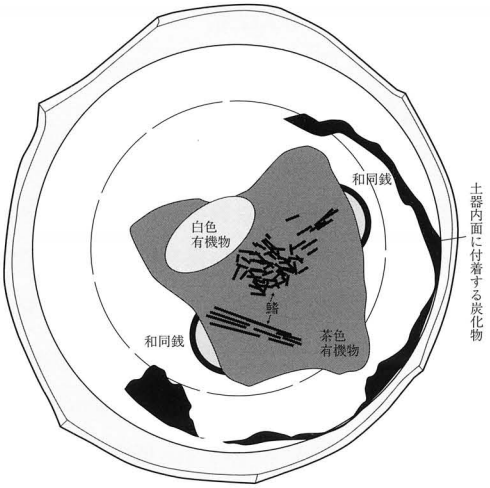
鎮壇具の納入順序　まずガラス小玉と和同開珎が納められる。このとき、これらが織物に包まれたか、あるいは織物が上方に置かれたかという点はさらなる検討を要する。次に植物質のものが敷き詰められ、魚の頭部（後述の分析を参照）が納められる。内容物納入以降は、１層の土壌が基壇築成土に類似することから、一気に埋められたものと考えられる。広口壺内面に貼り付く炭化物は、この壺が南よりに若干傾いて埋められたことで、内容物全体が傾き、そのまま腐食して付着したものであろう。

内容物　和同開珎は、５枚のうち４枚が完形で、１枚は腐食によって３分２程度が残存する。このうち３枚が表向き、２枚が裏向きで銭文の表裏は一定していない。銭文は肉眼では判別しづらいが、X線透過撮影によると隷書体で（同図６）、いわゆる新和同である。ガラス小玉は13点あり、全て完形である。取り上げた３点について見ると、寸法は、最大径が５～６㎜、口径が２～３㎜、厚さが2.5～４㎜で、大きさにやや幅をもつ。色調は風化によって白色～淡緑色を呈する。なお、銭貨とガラス小玉の取り上げは未完で、それ自体の分析は今後に委ねられる。

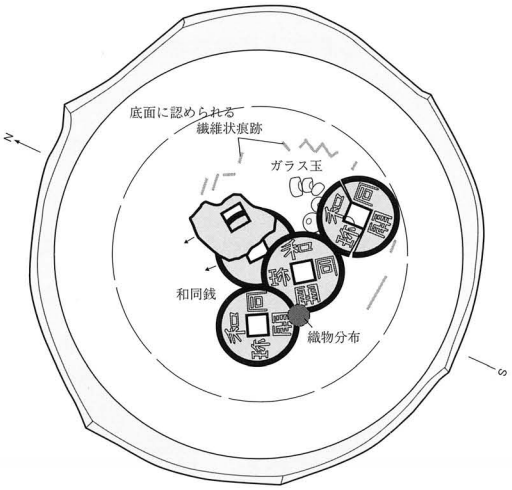
和同開珎とガラス小玉以外の内容物に関しては、後章の分析を参照されたい。　（芝 康次郎）



1．3層上部有機物検出状況

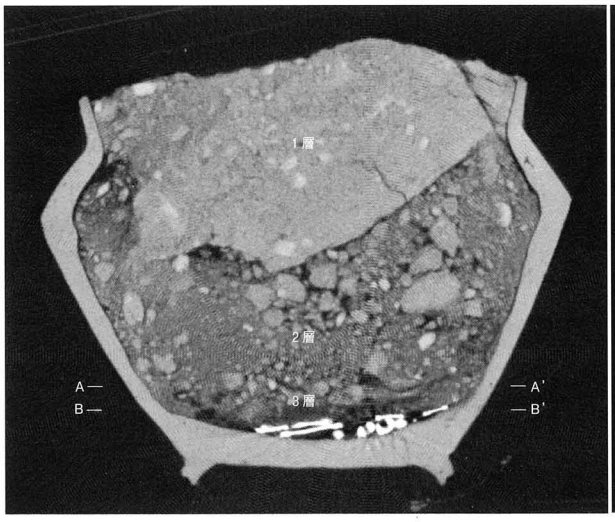


2．3層中部有機物検出状況

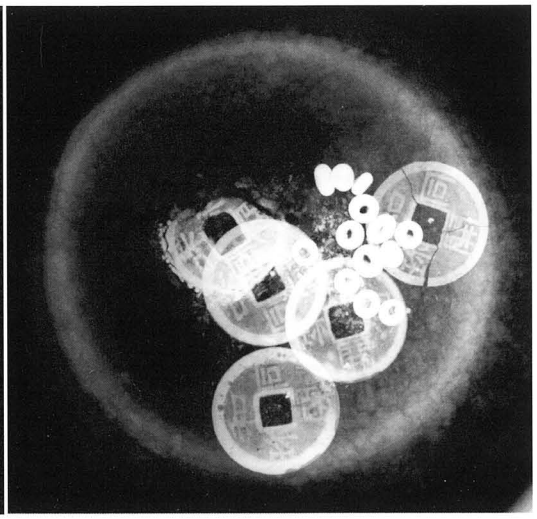


3．3層下部和同銭・ガラス玉検出状況
（壺内の矢印は銭文の向きを示す。）

4．3層下部ガラス埋納状況（X線透過撮影による）



5．CTスキャン画像による断面図
（AA'：3層上部平面図実測レベル、BB'：同中部平面図実測レベル）



6．X線透過写真による和同開珎とガラス玉

0　2：5　10cm

第27図　須恵器広口壺内の鎮壇具納入状況